
魔法少女シロクロ

たけひろ君

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女シロクロ

【NZコード】

N3880S

【作者名】

たけひろ君

【あらすじ】

天城ミウは普通の小学6年生。平和で満ち足りた生活に満足しつつも、「何かが変われば良い」そう思いつつも日々を過ごす普通の少女。少女が一人の青年と出会うときその日常が大きく変わる。

敷島ショウジは魔法使い。日常と非日常が交錯する世界で魔法の杖の代わりに漆黒の刃を振るい、異形の敵を切り刻む。青年が一人の少女と出会いうときその運命が大きく変わる。

二人は出会い一人は戦う、今青年と少年の物語が始まる！

ガール・ミーツ・ボーイ

黒一色に塗りつぶされた空にそびえる巨大な塔のよつな化け物。

かに
ひれ

それを呆然と眺める少女の視線の先には黒い外套を身に纏った青年が一人。青年は手に持つた長剣を構え化け物に向かい走り出す。

咄嗟に青年に向かつて叫ぶ、だが青年の耳に声は届かない。青年

「やがて速度を上げて駆け

塔のような化け物から無数の槍のような触手が青年を突き殺さんと迫る。それを青年は手にした長剣で斬つて斬つて斬り伏せる。やがて青年は無数の槍に囲まれその足が止まる。

青年は幼からぬ二、三の頃、太陽のうしとおは思ひ

獣のような咆哮をあげ触手で出来た檻を切り裂く。

もう止めて。」

に時に雑がれ飛ばされながら長剣を構えひた走る。

「駄目・・・止まつてよ・・・」

ついに青年は化け物の膝元まで辿り着く。獣のような咆哮をあげながら塔のように巨大な化け物を斬りつける。やがて化け物から今までに無い大量の触手が青年に向かって打ち出された。

「そ・・・・・そんな」

少女の目に涙が溢れた、青年のことは知らず、この世界が何なのかも知らずただただ涙が溢れた。やがて大量の槍の動きが止まつた、潮のように退いて行く槍の後には長剣を杖にした今にも倒れんとする青年の姿があつた。

「止めて…………！」

少女の世界は光に包まれた…………。

「ゆ…………夢…………だよね？」

少女がいたのはいつもと変わらなくベットの上、朝の光。先ほどまでのものは夢であったのだひつ、そう思い田をひかひつと田じりに指を当てた。

「あれ、涙出てる…………」

何故だろう、見たことも無い世界であつたことも無い青年が戦い敗れたただそれだけの不思議な夢が少女にはいやに悲しかった。「あの夢は何だったのだろうか」寝起きの頭でぼんやりと考えてみるが答えは出るはずも無く時間だけが過ぎていった。

「これ以上考えても仕方ない」そう思い少女は起き上がり朝の支度を始めた、今日こそが運命を変える日だと知らずに…………。

平和で平和で何も起こらないこの世界、帰るべき家があつて迎えてくれる家族がいて、温かいご飯が出て。そんなふうに恵まれたこの世界。毎日毎日惰性で、習慣で学校に行って授業を受けて仲の良い友達とおしゃべりして、そして帰りがけにすこし寄り道をしてそしてさよならまた明日するこの世界。

とても平和でとても幸せで、でもちょっとびり退屈な世界。「少し何か変われば良い」そう思つ自分がいて「何も変わらず生きていくたい」そう思う自分もいる。

そんな世界のそんな学校で私、天城ミウはうつむひつひつとしています。

「…………」で4／3と7／8を掛けると分母は 8×3 で24、分子は 4×7 で28となりますこれを約分して……

先生の声が随分遠くに聞こえる、ストーブに熱せられた教室、だんだん意識が…………。

「1)の問題は・・・・出席番号1番の天城さん」やつていただきましょ~」

「え・・・・・・・・あ・・・・・・えつと・・・・・・・・その・・・・聞いてませんでした・・・・」

「問題は2／7×4／9ですよ」

「あ、8／63です次からは『気をつけでさー』ね」

クスクスと隣で笑い声が聞こえます、隣に田をやれば親友のコキ

「ちゃんが笑っています

「笑わないでよコキ」ちゃん。昼眠りする回数はコキちゃんのほうが多いんだから」

「あら、2時間田から寝てる」「うがよく言つわ」

「ひど~い!寝てるのが分かつたんなら起しへても良いのに!」

「嫌よ、だつて私ミウの寝顔を見るのが趣味なんだもん」

「いやな趣味、コキ」ちゃんなんて嫌い!」

「嫌いで結構、もうお菓子作つても呼んであげないんだから」

「そ~れ~は~困る~」

「こんなふうに私の一田は過ぎてゆきます。」こんなふうにうつとずっと私の日常生活が続いていく・・・・今はまだいつも通りいました。

アントラクト

「ふいー、今回も変なところに巣を張つてやがったな畜生」
夕暮れの空の下、一人の青年が学生服にくつついた蜘蛛の巣やら埃やらを払いつつ薄暗い路地裏から這い出した。

「つたくよ、昨日から気配があつたから畠から学校サボつてまで探してやつたつてのにとんだ雑魚野郎だつたぜ」

青年はぶつぶつと呟きながらオレンジ色に染まつた市内随一の商

店街を青年は闊歩する。そのうちにふと薄汚い路地裏の前で立ち止まりポケットに手を突っ込み黒く丸い小さな宝石を取り出す。青年はじつとその宝石を睨む、すると宝石はまばたつと光り始めた。

「おひと、本日 2 発目だ」

青年は路地裏へと消えていった。

「じゃあねコキ」「やあまた明日口ー。」

「また明日」

時刻は夕刻、ミウはコキと別れて家路についているといひだつた。その日はなんともなしに早く帰りたかつたので近道となる路地裏へ入つた。

「今晚のおかずは何だらうへー。」「明日はどうなことをしてコキちゃん」と遊ぼうか「そんな」とを考えながら何度も使つてきた近道を歩む。もうすぐで路地裏の中へいりとおひだらうか、彼女の世界は一変した・・・・・・

続く

ガール・ミーツ・ボーイ（後書き）

どうもこんにちはたけひろです。

この小説前にも全く同じタイトルであるのですが・・・。
設定とかちゃんとしなかったからかだんだん書くうちに破綻すると
言う状況になつてしましましたので書き直すことにしました。

今回は後先考えて作つてるので今までの奴よりは・・・ま
しになると思います。
と言つわけでまた次回。

ファースト・コンタクト

ぐにやり、視界が一瞬垂にゆがんだ。

「え・・・・・？」

長く座つた後の強い立ちくらみのような感覚がミウを襲つた。少し体がふらつく。何があったのか分からぬままあたりを見渡した。そこは・・・・・・先ほどまでの路地裏ではなかつた。

「ど・・・・・・！」

不気味に薄暗く大量のトーテムポールが立ち並ぶ空間にたつた一人でミウは立ちすくんでいた。その中に遠くに一本だけ巨大なトーテムポールが聳え立つている。

ズモ・・・・・・・・巨大なトーテムポールが動いたように見えた。

「え・・・・・・？」

ズモ・・・・・・・ミウの周囲に立つていたトーテムポールまでが動き出した。ズモ・・・・ズモ・・・・・・・悪いことにトーテムポール徐々にミウの周りに接近してくる。

「こ・・・・・・・来ないで！」

ズモ・・・・・ズモ・・・・ズモ、近寄つてくるトーテムポールの数がさらに増える。遠くに見えていた巨大なトーテムポールもかなり近くなっている。

今まで震えながらも何とか気力を保つて立つっていたミウだがそれも既に限界となりへたりこんでしまつた。そのうちにトーテムポールはミウを囲み円状に並び、遠かつた巨大なトーテムポールはもうあと10mと言つところまで迫つていた。

「もう駄目だ」そう思つた、ここがどこなのかは分からぬしこのトーテムポールが何なのかも全く分からぬ。それでも「自分はもう駄目だ」そう思つた。「悪い夢であつて」そう思いミウは目を閉じた、しかしトーテムポールがその輪を狭めるべく動いている音

は聞こえた、さらに他よりも大きな音で巨大なトーテムポールが目前に迫つてることが分かつてしまつ。ミウはさらに強く目を瞑つた。

その時だつた、ガラガラと何かが崩れる音が背後からする。恐る恐る目を開けてみると目前まで迫つていた巨大なトーテムポールは4mほどのところで歩みを止め、周りを囲つていたトーテムポールも動くを止め、その沢山彫られた顔を全てミウの真後ろへと向けていた。

「な・・・・・に・・・・・？」

ミウも後ろを向いた、そこにいたのは・・・・・真っ黒な外套を纏い、真っ黒な一本の長剣を持つた青年。その姿はまるで昨日の夜に見た夢の中でたつた一人戦いに赴く青年のまま。

「誰か巻き込まれたのは分かつたが間に合つてよかつぜ。大丈夫かお嬢さん？」

口元に微笑を浮かべ余裕の表情でつかつかとミウに歩み寄る青年。ミウに近寄る間に一本のトーテムポールが驚異的な跳躍で青年に襲い掛かつたが事も無く長剣で切り裂きミウを抱き起こした。

「だ、誰？」

「さあな、ジョン・ウェインとでも名乗つておこつか。ここで大人しくしといってくれよ、2分でいつもの日常に戻してやるからさ」さもなんでもないよう青年は言つと手にした長剣を構え、手近なトーテムポールから切り裂いていく。ついにミウの周りを囲つていたトーテムポールたちはバラバラの木つ端となり、残るは巨大な一本のみとなつた。

「さて、残るはデカブツだけか？刻んでさつさと終わらせてやるよー！」

青年は長剣の柄を握り直すとトーテムポールとの距離を一息で詰め一閃、トーテムポールを真つ二つに叩き斬る。

しかしトーテムポールは達磨落としのよつて長さが詰められただけで健在だ。

「クソッ」悪態をつくともう一閃もう一閃とトーテムポールの長さを詰め終いには自分の膝ほどの高さになつたトーテムポールに長剣を突き刺し空中に放り投げ落ちてくるトーテムポールを縦に真つ一つに両断。

青年は長剣を振り刀身にまとわりついた木つ端を振り落とすと虚空に消してしまつた。と、その途端に今までいたトーテムポールばかりの荒涼とした空間はいつの間にかもとの路地裏となつていた。

「お嬢さん、大丈夫か？」

青年はミウを抱き起こし無事を問う、「だ、大丈夫です」とミウが答えると青年はその場を立ち去つとした。

「待つてください」

ミウは青年を呼び止める、

「さつきの・・・・・さつきのつてなんだつたんですか？」
「どうしても先ほどのことが信じられなかつたからだ。

「夢さ、悪い悪い白日夢さ」

青年はそれだけ言い残すと足早に立ち去つていた・・・・・・・・

・
「な、なんだつたの？」

残つたのは謎と路地裏を駆け抜ける風だけだつた。

ファースト・コントラクト（後書き）

いつもお久しぶりです。

今回は短めであります、今まで書いていたシロクロとは話の流れが全く違います。

理由は簡単「こっちのが書き易くね？」せっかく考えたお話もこんな奴に考えられたのでは不幸だろう・・・・まあ全ては僕の文章力不足の賜物なのですが。

よし、国語の勉強をしよう。
ではまた次回。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3880s/>

魔法少女シロクロ

2011年10月6日01時28分発行